

# 韓国初等実科教育の教科特性と活動中心の学習戦略の動向

多々納道子\*・李慶愛\*\*・鄭暁静\*\*\*・丸橋 静香\*\*\*\*・正岡 さち\*

Michiko TATANO, Kyoung Ae LEE, Hyo Jung JUNG, Shizuka MARUHASHI, and Sachi MASAOKA  
The Feature of Curriculum Construction of Practical Art Education and Development of Action-Oriented Learning Strategies in Korea

## 要 旨

本研究は、日本の小学校家庭科とは教科特性を異にする、韓国初等実科教育課程の変遷やその特性、ならびに活動中心の学習戦略として注目されている活動中心の栄養教育の特徴を明らかにすることを目的とした。第一次から第七次までの実科教育課程の変遷からみると、第七次教育課程において、実科教育の教科特性として、児童の実践的な経験と実生活上の有用性を重視する教科であることが確立したといえる。それは、教科の哲学的基礎を労作教育において手工活動を必須とし、活動の過程で創造的変容を大事にするという性格を持つものであった。

栄養教育に関する活動中心の学習戦略は、実科教育を学習する児童の発達を踏まえて開発されたものである。すなわち、認知発達の面からみて活動的で好奇心が強く、また本質的に探究心が強いという発達の特性を生かすとともに、児童の活動欲求と身体的な発達を考慮し、「遊び」、「ゲーム」、「童話作り」、「歌う」、「歌の歌詞作り」などの学習活動と、実際に調理を行うなどの体験活動中心の学習を行うことが大きな特徴である。日本の家庭科においても大いに参考になるものであり、授業実践によって検証が求められるところである。

【キーワード：韓国の実科教育、教育課程の変遷、第七次実科教育課程、活動中心の学習戦略】

## I はじめに

韓国の学校教育は1954年に国家水準の第一次教育課程が制定されてから、現行の2009改訂教育課程（2009年～）に至るまで、9回の改訂を繰り返し大きく変化してきた。その中で第七次教育課程は、それまでにはみられなかった特徴を有するものである。すなわち、まず初等学校1年から高等学校1年に当たる10学年までを対象とした10年間を、国民共通基本教育期間として設定したことである。次に、この期間には表1に示したように、国語、算数（数学）、社会、科学、実科（中学校と高等学校では技術・家庭）、体育、音楽、美術、外国語（英語）と道徳を合わせた10教科を、国民共通基本教科として履修するように編成したのである<sup>1)</sup>。

これら10教科の中で、日本の小学校家庭科に該当する

のが実科教育である。第七次教育課程における実科教育は、国民共通基本教科の一つであることと、それまでの統合内容あるいは統合活動のどちらかを重視するという二者択一ではなく、両者に重点をおくという観点から改変し、第七次教育課程以降のモデルとなる構成になっている。ただ、実科教育は日本の家庭科と全く同じではなく、例えば内容では、家族、衣生活、食生活や住生活など家庭生活の学習に加えて、技術や職業分野を含むという広がりを持ち、教科の定義や性格を異にしている。

しかしながら、このような実科教育の教科特性は、日本の小学校家庭科教育のあり方を検討する際に大いに参考になるものである。

また、日本と韓国ともに、児童・生徒の食生活の実態からみると食育が重要になっている。食育の実践には家庭科及び実科教育に多大な期待がかけられており、指導

表1 韓国の第七次教育課程の編成

学年	履修教科
1～2	国語、算数、正しい生活（社会）、賢い生活（科学）、楽しい生活（芸術）
3～4	国語、算数、社会、科学、体育、音楽、美術、外国語（英語）、道徳
5～6	国語、算数、社会、科学、実科、体育、音楽、美術、外国語（英語）、道徳
7～10	国語、数学、社会、科学、技術・家庭、体育、音楽、美術、外国語（英語）、道徳
11～12	選択教科

出典：教育人的資源部告示『教育課程総論』、2007年、により作成

\* 島根大学教育学部人間生活環境教育講座

\*\* 韓国釜山教育大 学校実科教育科

\*\*\* 島根大学大学院教育学研究科

\*\*\*\* 島根大学教育学部初等教育開発講座

の工夫が求められている。そこで、韓国教育部から出された第七次教育課程における実科教育課程解説書など<sup>2)3)</sup>によって、実科教育課程の変遷や教科特性とともに、学習戦略として実科教育において注目されている活動中心の栄養教育<sup>4)</sup>の特徴を明らかにすることを目的としている。

## II 第一次から第七次実科教育課程にいたるまでの変遷

実科教育課程の変遷や教科特性を明らかにするにおいて、本研究では第七次教育課程に焦点をあてているので、表2に示したように第一次から第七次までの実科教育課程の特徴を概観する<sup>5)</sup>。

第一次教育課程（1954～1963年）において、「実科」という教科名が初めて使用された。内容は家事、職業や図画工作などの内容を統合して広範囲に渡るものであった。ただ、技能に関する内容は男女別に構成されており、6学年の教科書は男女別の編集であった。

第二次教育課程（1963～1973年）では、実践力をもつ有能な社会人として自立できる子どもを育てるため、生産性や有用性を高めるように努力するとともに、生活経験を通した教育を重視した。第一次教育課程とは異なり、全ての内容が男女共通履修となった。

第三次教育課程（1973～1981年）では、国民精神教育の強化を反映したり、学問中心の教育課程を背景にしたりする基本概念のもとで、知識の構造的学習、探究能力を重視した。そして、単純な労作よりも創意工夫することや能率の向上を図る能力も重視するものであった。家庭生活と工作領域の二つに重点がおかれた。

第四次教育課程（1981～1986年）では、学習の量とその水準を適正化するため、初めて初等・中学・高校の教育課程が同時に改訂された。それは、実生活での有用性を重視するものであった。その内容は家庭生活中心の4領域に統合され、基本的な生活機能の習得に重点をおいた。また、社会や家庭生活の変化への対応として消費者

教育と職業の理解について、強化されるものとなった。

第五次教育課程（1987～1992年）は、第四次教育課程の基本的な枠組みを維持し、生活の計画と管理、消費と節約、職業の理解など4つの領域別目標を設定した。また、コンピュータに関する内容が初めて導入された。補助教科書である「実習の手引き」が作成されるなど、時代の要求を反映し実用性がより一層重視された。

第六次教育課程（1992～1997年）では、履修対象者をこれまでの4学年から3学年からとしたが、各学年の履修時間は週2時間から1時間に減少した。また、領域の名称を「扱い」、「作り」、「手入れと育てること」、「処理すること」など、生活行動を示す表現によって設定し、仕事の計画・実行から評価に至るまでの全過程を通して学習し、問題解決にアプローチできるようにした。

第七次教育課程（1997～2007年）は改訂総論の基本的な考え方により、10の国民共通基本教科の一つとして中等の技術・家庭と連携するように、5～6学年の実科は設定された。実科（技術・家庭）教育課程改訂の重点は基礎的生活知識及び技術の習得と適応力を高めること、職業の理解の充実、コンピュータ教育や環境教育、消費者教育の重視、教育課程運営の多様化などが強調された。実科教育は初等学校の5～6学年で学習するので、7～10学年の技術・家庭と接続するように編成されたものである。当然のことであるが、男女ともに履修するものである。実科の性格、目標や内容などを踏まえて、系統性や統合性を持たせながら、技術・家庭と連携することを重視している。それゆえ、5～6学年は基礎レベル、7～10学年ではその上位レベルを学習することになる。11～12学年は高等学校での履修になり、一般選択と深化選択を置き、学習内容のレベルを考慮して編成されており、週当たり2時間の編成となっている。

以上のように実科教育課程は、教科編成方式や教育目標及び教育内容についてみると、第一次～第三次と第四次～第七次までとは、独立教科型か折衷教科型か、職業教育重視か普通教育・教養教育重視か、背景とする学問の特性重視か技能重視か、さらに単純に内容領域を重視

表2 教育課程変遷に伴う実科教育の編成原理

課程区分	第一次	第二次	第三次	第四次	第五次	第六次	第七次
教科編成方式	独立教科接近			折衷的接近			
教育目標	職業教育的接近（衣食住・職業重視）			普通教育的・教養教育的接近（能力開発重視）			
教育内容	重点	学問の特性重視（仕事と関連した伝統的領域重視）		実科教育の技能重視（教育領域拡大）			
	選定及び組織	内容の領域中心の接近		統合内容中心接近		統合活動中心接近	統合内容および活動中心接近
履修方法	学年	固定（4～6学年）				拡大（3～6学年）	縮小（5～6学年）
	時間	履修時間の減少化					
	履修	男女区分的履修	男女共通履修				

出典：イチュンシク『実科（技術・家庭）教育目標及び内容体系に関する研究』、韓国教育課程評価院、2001年

するのがあるいは各内容の統合を重視するののかという観点などで大きく異なっていた。この教育内容に関しては、さらに第四次・第五次と第六次では統合内容を重視するのがあるいは統合活動を重視するののかによって変化し、第七次では統合内容および統合活動の両者を重視するというようになった。

また、履修方法については、4学年から6学年まで履修することを基本としたが、第六次教育課程では3学年から6学年までというように拡大したものの、次の第七次教育課程では5学年と6学年でのみ学習するように短縮してしまった。履修時間を含めて考えれば、履修学年と履修時間も次第に減少化の傾向をたどっているといえる。男女の履修については、第一次のみ別学であったが、それ以降は共通履修となり、実科教育が普通教育・一般教育であることを逸速く示したものと見える。

### Ⅲ 第七次実科教育課程の特性

#### 1. 教科の定義

実科教育という名称の教科は、欧米から教育課程を導入して以来、世界で唯一韓国独自の教科として存在している。実科教育の英語表記は、アメリカで使用されている“Practical Art Education”である。語源的にみれば、韓国の実科教育はRes（羅 ラテン）、またはRealien（独 ドイツ）のように実際に存在することを（Sache実物）意味し、自然、生活や技術などの実際上の知識や技術を学ぶので、人文科学を背景とする教科とは区別される。したがって、実科教育の“実”に含まれている意味を事典的に解釈すると、実践的なこと、実物的なことや体験的なことを示すことになる。同様に、実科教育の英語表記“Practical Art Education”の“Practical”の意味は実際の、実用的、実践的や応用的という意味である。すなわち、韓国の実科教育はその名称が示すように、実践的、体験的な活動を重視する教科として位置づけられている。

かつて、実科教育は一般教育・教養教育という位置づけではなく、家政や農業、工業、商業などと同様に職業的な意味合いを強く持つ教科であった。それが第四次教育課程以降、一般教育・教養教育の一つとして位置づけられるようになった。したがって、韓国の実科教育は初等教育機関において初等教育段階の児童に一般教育・教養教育として提供される教科であり、その背景となる学問の生命科学、技術学や家政学などから取り出した内容

を中心に、プロセスに重点をおいた体験活動を通して学び、それによって児童が日常生活の中で創意的、効果的に問題解決が可能になるように、方法的な知識、実践可能で統合的な知識活用能力、しかも仕事に対する肯定的な態度などを養う目的をもつ教科となっている。

#### 2. 実科教育の性格

実科教育は児童の実践的な経験と実生活上の有用性を重視する教科であり、“実践的な生活能力をつける教科”、“創造的な労作教科”としての性格を持っている。

##### (1)実践的な生活能力をつける教科

実践的な生活能力をつける教科という意味は、日常生活に関する実践的な活動を強調し、それに関連する生活活動を体験し、問題解決の能力を育成することである。すなわち、実際の日常生活上の問題を解決するには身体的な能力とともに、材料と道具を操作する基礎的な能力が必要である。これは初等教育段階では実科教育を通してのみ体験でき、また習得できるからである。

##### (2)創造的労作教科

創造的労作教科の意味は、体験活動を通して課題遂行に関する方法的な知識を活用し、問題解決過程で身体的な体験活動と目標志向的に行われる遂行能力を積極的に活用できる教科ということにある。

##### (3)総合的な教科活動

統合的な活動教科の意味は、実科教育の問題解決過程において、それまでに学習した知識や体験、情報などを創意的に活用して新しい体制や物を作っていくことである。

##### (4)実科教育の哲学的基礎

初等実科教育の哲学的基礎は、労作教育から見出される。労作教育には手工活動が必須で、活動の過程で創造的変容を大事にして進行するという性格を持っている。初等の実科教育は、児童の実践的な活動を基本とする。これは自分の手を用いて実際に体験する実習活動と知的能力を併せて、問題解決能力、分析的な思考力、実生活への適応能力を育成するためである。初等実科教育のこのような意図は、手工活動に創造的な変容能力と思考力を切り結ぶことを求め、くらしの内容に教育的な価値を有する労作教育に通じていると理解できる。

##### (5)実科教育の目標

実科教育は家庭生活をはじめ、日常生活に必要な基礎的な経験を通して仕事の重要性を認識させ、仕事を遂行する基礎能力を養い、実生活に活用できるようにすることである。同時に、個々の児童の問題解決能力と創造性、

表3 第七次実科教育課程の目標体系

総括目標	個人と家庭、産業社会の理解と適応に必要な知識と技能を取得して、家庭生活を充実し、情報化、国際化などの将来の社会の変化に対応できる能力と態度を育成する。		
観点別目標	仕事と生活に関する経験を通して、生活に必要な基礎的な知識や技能を習得する。	技術と家庭生活に関する様々な実践的な体験を通して自分の適性を開発し、進路を探索して仕事に対する健全な態度を持つ。	仕事を創意的に計画し、自分の将来の生活を合理的に設計でき、それに必要な準備ができる。

出典：韓国教育部『初等学校教育課程解説Ⅳ—数学、科学、実科—』、1999年

協同性を増進させることである。そして、健全な生活態度を育成し、生活力を向上させ、未来に対処し、社会の発展に寄与できる基本的な能力と態度を養うことを目標としている。

#### (6)実科教育の内容

実科教育は家庭生活に必要な基礎的な知識や技能を習得し、実生活における有用性を理解し、実践力を養うための教科として意義がある。したがって、第七次実科教育課程では教科の性格に合致するように「家族と仕事の理解」、「生活技術」、「生活資源と環境管理」の三つの領域からなり、各領域は個人、家族、地域社会と国家、世界へとその対象を広げている。特に、次のような内容に重点を置き、その内容を体系化している。

- ①実生活に適応して生活の質を高める内容
- ②活動を通して仕事の経験ができる内容
- ③生徒の興味と関心を高める内容
- ④自己啓発的な内容を含んだ内容

表4は、第七次実科教育課程での教育内容の体系を示したものである。

#### (7)実科教育の教授・学習過程

①創造的問題解決能力を身につけるための授業を展開する  
実科教育の全領域は児童の創造性を育成するためにふさわしい内容で構成されている。したがって、実科教育

課程を固定的に設定するよりも児童の実態に応じて柔軟にできるようにするとよい。そのため、他の生活問題についても応用できるように、手順よりも学習した知識や技術を生かして解決に取り組めるような計画の立案、取り組みの実際、その結果を評価し、再度取り組みの計画を立案するというように、問題解決型の授業を実施する(問題解決法、ホームプロジェクト法)。

②創造的な変容を基盤にした体験的、実践的、労作教育を展開する

実科教育はただの労作教育としてではなく、労作として仕事の経験を体験するようにしている。すなわち、創造的な変容の可能性を伸ばす教育課程の運営を重視している。

特に、実科教育は仕事の体験が大事な教育的な課題で、その体験が児童自身に与えられているから実現できる。児童が学習過程の全過程を自ら体験し、追求しながら理解する学習は、主体性と自発性を育成できるのである。児童が主体となる授業を展開するためには、児童の多様な思考、興味、関心を尊重し自主的、自発的に学習に集中できる場(実験、実習、調査、観察)をできるだけ多く設定するように、学習戦略を展開することが重要である。

③共に問題を追究し、仕事を体験する協同的な学習戦略を展開する

実科教育で扱っていることは、その特性上共に経験して解決にいたるという協同して遂行することに大きな意

表4 第七次教育課程における実科の教育内容体系

領域	5年生	6年生
家族と仕事の理解	○私と家庭生活 ・家庭生活の重要性 ・家庭での私の位置と役割 ・生活計画と実践	○仕事と職業の世界 ・家族の仕事 ・職業の世界と進路計画
生活技術	○児童の栄養と食事 ・児童の栄養と食品 ・調理器具の使い方 ・簡単な調理 ○簡単な生活用品作り ・スキル刺繍 ・編み物 ・縫い物 ○電気用品使用と電気キット作り ・電気用品の使用 ・電気キット作り ○花と野菜の栽培 ・花作り ・野菜の栽培 ○パソコンの操作 ・パソコンの構造 ・キーボードと文字入力	○簡単な食べ物作り ・食品の選び方と利用法 ・ご飯とパンを用いた食事作り ○ミシンの利用法 ・基礎縫い ・簡単な生活用品作り ○木製品作り ・道具の使い方 ・簡単な木製品作り ○動物の飼い方 ・ペット、金魚の飼い方 ・家畜の飼い方 ○パソコンの活用法 ・パソコンによる描画 ・パソコン通信の活用
生活資源と環境管理	○小遣いの管理 ・小遣いの使用計画と小遣い帳管理 ・金融機関の利用法 ○生活環境の整備 ・机とクローゼットの整理・整頓 ・掃除とごみの処理	○資源の再利用 ・生活資源の利用と節約 ・生活用品のリサイクル ○家庭環境の整備 ・室内環境の整備 ・木の植え方と手入れ

出典：韓国教育部『初等学校教育課程解説Ⅳ—数学、科学、実科—』、1999年

味をもつ。したがって、共に問題を追究し、仕事を経験する協同的な学習戦略を展開している。

④児童の個人差を考慮した授業を展開する

実科教育では児童の家庭生活が学習対象になるので、児童は自分の家庭や社会の実態により生活経験が異なり、生活様式が違っている。そのため、個人差を考慮した授業であることが重要である。つまり、実科教育での学習方法は児童の個別の実態や条件に合うように調整して授業を展開している（児童の習熟別、または関心や興味別に分担作業のモジュール学習、ホームプロジェクト法など）。

⑤パソコンなど教育工学的媒体を補助的に活用する

パソコンを活用した教育方法のMBI（Multimedia Based Instruction）やWBI（Web Based Instruction）は実科教育でのパソコン領域だけでなく、他の領域からも情報を収集し、問題を解決するのに役立つ。したがって、パソコンを中心にした教育工学的アプローチによる教育方法は、実科教育にも重要な意味をもつ。ただ、実際の体験中心の「育てる」、「作る」などの領域では、情報収集段階だけで活用することが望ましいとされている。

Ⅳ 実科教育における活動中心の学習戦略（栄養教育）

実科教育の定義や性格の項で述べたように、実科教育はその名称が示す通り、実践的、体験的な活動を重視する教科として位置づけられている。そのため、実科教育の授業実践に適するとされる教授・学習過程をみると、問題解決法、ホームプロジェクト法、実験、実習、調査などいわゆる活動中心の学習戦略が提起されている。そこで、栄養教育についての活動中心の学習戦略の必要性やその特徴について明らかにする<sup>6)</sup>。

1. 活動中心の栄養教育の必要性

初等教育段階の児童は、認知発達の面で具体的な操作期にある。したがって、活動的で好奇心が強く、また本

質的に探究心が強いという特性がある。この時期の栄養教育は、児童の活動欲求と身体的な発達を考慮し、「遊び」、「ゲーム」、「童話作り」、「歌う」、「歌の歌詞作り」など様々な「作り活動」及び調理などの体験活動中心の学習が行われるように計画する。また、この時期の児童は、楽しく学ぶことができれば、さらに意欲をもって学ぶようになる。そこで、初等学校での栄養教育は児童が興味をもって学習できるように、自ら参加できる活動中心の学習戦略が必要となる。

2. 活動中心の栄養教育

①食品構成塔活動

食品構成塔活動というのは第七次「韓国人の栄養勧奨量」の食事構成案に提示した食品の分類とバランスが取れた食生活のため各食品群の重要性を分かりやすく表示した絵である。

食品構成塔活動は、食品構成塔を利用して学習者に食品と栄養との関係、食品の栄養素の身体内での働きを理解し、健康な食事ができるように食品摂取量の比率を知って、自分に適切な食生活を理解できるようにする栄養教育方法である。食品構成塔活動は栄養と食品、栄養と健康やよい食習慣の形成などの学習を栄養素という抽象的な概念から始めるのではなく、児童の実生活と関係の深い食品から学ぶというものである。児童が自分で食品を5つに分類し、各食品群に対する重要度を塔の概念を通して理解し、自分の食生活について考え、改善できるようにするものである。この食品構成塔はフードガイドの一種であり、初等学校段階から活用できるように、工夫されている。

このようなフードガイドは、アメリカ、イギリスや日本など先進諸国で肥満や生活習慣病の予防を目的として、食生活の指針を容易に実行できるようにするツールとして開発し、使用されている。日本では2005年に食事バランスガイドという名称で策定されたが、小学生では難易度が高く、あまり活用されていないのが現状である<sup>7)</sup>。

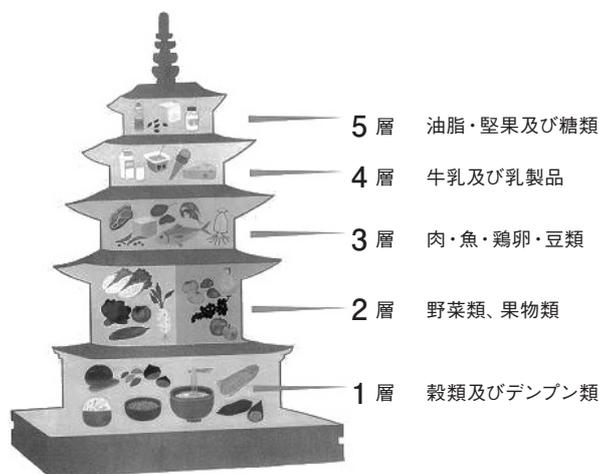


図1 食品構成塔  
 出典：『中学校技術・家庭1.』、デウサンドンア、2009年

表5 活動例

<p>活動：紙の上に5層の塔を描いて、塔の各々の位置に、朝、昼、夕、おやつで食べた食品や飲み物の名前を書く。</p> <p>評価：① 自分の食品構成塔はバランスがよいか。</p> <p>② 毎食、5群の食品群の中で少なくとも3つの食品群が入っているか。</p> <p>③ どの食品群にあいているところが一番多いか。他の群に多すぎるところはないか。</p> <p>④ 間食は最少2つの食品群を含めているか。</p> <p>⑤ 自分の食品構成塔をもっとバランスよくするために変える必要はないか。</p>
---

出典：李慶愛「活動主義に基づく初等学校活動中心栄養教育方案」、韓国栄養学会論集、第36巻4号、2003年

## ②栄養遊びとゲーム

栄養遊びとゲームは、児童が遊びとゲームに直接参加し、多様な活動が行われるので、食生活学習の主題についてより強い興味をもち、さらに集中できる。また、遊びとゲーム活動では、児童はどんな活動をするかについての問題認識を正確に行うために、問題を正しく理解しようとする傾向がある。このような過程の中で児童は自分で食生活に関する内容を学び、その内容をもう一度検討することによって、食生活についての学習が自然にできるようになる。このことは、単に栄養の知識を暗記するのではなく、各状況にあった食生活に関する問題解決力を養うことにつながる。

## ③本読みと話作り

### 1) 食品と栄養に関する本を読む

食品と栄養をテーマにした子ども向けの本は、児童に栄養と食品に関する肯定的な考えをもつようにさせる。児童は本に紹介されている食生活に関する内容について討論するとか、本の内容について絵を書くとか、本に紹介されている食べ物の料理法をまとめて、調理活動ないしそれに関する歌や芝居を作ってみることもできる。

### 2) 童話を聞いてその後の話し作り

児童が知っている童話の内容の一部を変えて聞かせ、その内容について栄養的なことを追加しながら、創作する活動である。例えば、ヘンゼルとグレーテルに登場する魔女が、自分の所に訪ねてきた子どもの栄養や健康に関しては、本当によい魔女だと想像するように。生姜パンや砂糖のかわりに、彼女の家はどんな食べ物で作らざるを得なかったのかと想像した後、その次の内容を栄養的な要素を付け加えながら作ってみるということである。

### 3) 童話の書き直し

児童が親しみをもっている童話を利用して、その話に食品と栄養、食習慣、食事マナーなど、食生活に関する内容を追加して書き直そうとする活動である。例えば、ファーストフードばかり食べるピノキオ、偏食する白雪姫、キムチと豆が好きなシンデレラ、健康豚三兄弟、栄養素神の話、ギリシャやローマの神話などは良いテーマになる。

## ④書く活動

初等実科教育の栄養教育で書く活動は、食品についての感想を書いたり、食品について詳しく描写したり栄養日記を書いたり、学校給食の栄養士や食品会社に手紙を書いたり、家族食生活史を作ったりすることなどをあげることができる。

### 1) 食品をテーマにした文章

食品に対する最初の体験について書くようにする。つまり、食品についての記憶、感情、経験などを書くことである。児童が特別に幸せに感じたこと、悲しかったこと、腹の立ったことなどの記憶があった食べ物や食事について、なぜそのように感じたか、そして一緒に食べた人々についての記憶も書くようにする。このような活動は児童の偏食を治すのにも役に立つ。

### 2) 食品について詳しい描写

食品の写真やポスター、または本物の食品を提示して、それについて児童ができるだけ詳しく説明する活動である。異なる食品が人間の五感にどのように感じられるかについて書くようにする。このような活動は、児童に食品について関心を持てるようにし、今まで嫌がっていた食品やあまり食べなかったものを食べられるようになるきっかけになる。

### 3) 栄養日記

栄養日記を書く活動は、教師が週1回、または月に1～2回ぐらい食生活に関するテーマを提示して、これに関する日記を書くことが可能であるし、児童に自分でテーマを選んで日記を書くようにすることもできる。このような方法は、週に1回または月に1～2回ぐらい児童に食品と栄養、正しい食生活、食事マナーなどについて、反省をする機会になるので、初等実科教育学校の栄養教育として非常に効果的である。雑穀飯、菓子、朝食、栄養表示、炭酸飲料、ファーストフード、牛乳、給食などは栄養日記のよいテーマとなる。

## ⑤歌と歌作り

歌は、楽しいメロディーを通じて学習に対する興味と関心を引き起こすという心理的な効果があるだけでなく、言葉を繰り返すことによって高い記憶効果をもたらす。栄養教育で歌は、食品と栄養に関する基礎知識、摂取の重要性、食品と健康との関連性、正しい食習慣や食事マナーを楽しく学べることができる効果的な方法になると思う。

歌詞を変えて歌うのは、児童が親しんでいる教科書の歌の歌詞を食生活に関する内容に変えて児童が歌う活動である。児童は食生活に関する内容について、歌詞を変えながら食品と栄養に対する知識をつけることによって、正しい食生活や食事マナーについてももう一度考えるようになる。しかも、自分で作った歌なので簡単に覚えるし、歌に対する関心と興味を持つようになる。

### ⑥モニタリング、食品広告モニタリング、放送モニタリング

食品広告や放送モニタリング活動は、食品広告や放送中の食品と栄養情報を分析して、消費者の児童が正確な情報を受け入れる能力をつけるようにする。

### ⑦劇活動（役割劇）

栄養教育活動として役割劇は、児童に食生活に関する問題を提示し、その状況で登場人物の食生活に何が問題か、これをどのように取り組んだらいいのかを経験させて、その架空の人物の食生活を通して自分の食生活問題を振り返ってみて、正しい食生活に対する関心と態度を養うのに効果的だといえる。また、以下のような問いを含む役割劇は、児童の成長過程で経験できる食生活に関する様々な状況の下での役割を果たすことができるようになるので、これから同じような状況に会えば大変役に立つ。

放課後、あなたはいつもお腹が減る。そこで、母親がいないとき、菓子を食べて外で遊んだ。それで、夕食の時はお腹が減らない。これから放課後お腹が減ったらあなたは どうするつもり？

平日の朝、あなたは朝ごはんを食べるよりも寝たくなり、朝ご飯抜きで学校に行く。学校へついてすぐにはお腹が減ってなかったが、時間がたつにつれて頭が痛くなったり、お腹が減ったりして、だんだん辛くなっていく。あなたは この問題を どうするつもり？

### ⑧討議・討論活動

栄養教育の方法の中で、討議・討論活動は、児童が自分の実際の食生活の中でおかしいと思っていたことに対する解決案がみられ、そのようなことについて自分が今までやってきた習慣や行動、意見を発し、他の児童が考えていることが発見でき、自分の食生活に関する見解や観点を再評価して、食生活問題を正しくすることを自分で探せる。

- ・インスタント食品（例、ラーメン）は体によいかどうか。
- ・朝食は食べなければならないか。
- ・ファーストフードは体によいかどうか。
- ・牛乳は毎日飲んだほうがよいか。
- ・キムチはよい食品か。
- ・コーラは体によいか。

などのテーマは、栄養教育にとってよい討議・議論のテーマになりうるか。

### ⑨調理活動

調理活動は、児童の栄養教育として極めて良い方法である。調理活動を通じて、児童は今まで親しんだことのない食品に親しめるようにもなり、今まで食べなかったものでも自分で作ったものなので食べられるようになる。

栄養教育の最終的な目標の行動変化を目的に行われた授業では、必ず食品でなされる実際の体験がなければならない。調理活動は、食品と栄養に関する基礎的な知識が適応できる方法の一つで、栄養教育ではこの食品調理

活動がなくてはならないものである。

児童の調理活動は、正しい食習慣にも役立つので、調理活動をただの調理技能の取得だけではなくて、バランス食と関連して調理された食べ物とバランスのある食事のために慣れなければならない食べ物なのかを考えさせ、食品の選択と評価に児童を参加させる。

このように、栄養教育について活動中心の学習戦略には、日本でよく用いられる栄養遊びやゲームだけでなく、食品構成塔活動、本読みと話し作り、書く活動、歌と歌詞作りやモニタリング、食品広告モニタリング、放送モニタリングなど児童が興味・関心をもてるように工夫した新しい方法の提案が多く見られた。日本の小学校家庭科だけでなく、中学校や高等学校の家庭科においても適用可能であり、授業研究によって、その効果が実証されるとよい。

## V まとめ

韓国初等学校の教育課程は、第一次教育課程から現行の2009改訂教育課程（2009年～）に至るまで、9回の改訂を繰り返し大きく変化してきた。その中で第七次教育課程は、初等学校1年から高等学校1年に当たる10学年までを対象とした10年間を、国民共通基本教育期間として設定し、国語、算数（数学）、社会、科学、実科（中学校と高等学校では技術・家庭）、体育、音楽、美術、外国語（英語）と道徳を合わせた10教科を、国民共通基本教科として履修するという特徴をもつものである。これら10教科の中で、日本の小学校家庭科にあたるのが実科教育である。この実科教育は日本の家庭科と全く同じではなく、家族、衣生活、食生活や住生活など家庭生活の学習に加えて、技術や職業分野を含むという広がりを持ち、教科の定義や性格を異にしている。また、日本と韓国ともに、児童・生徒の食生活の実態からみると食育が重要になっている。食育の実践には家庭科及び実科教育に多大な期待がかけられており、指導の工夫が求められている。

そこで、日本の小学校家庭科教育のあり方を検討する際の参考資料とするため、第七次実科教育課程に着目し、それまでの実科教育課程の変遷や教科特性とともに、実科教育において注目されている活動中心の栄養教育で重視される学習戦略としての特徴を明らかにした。

第一次から第七次までの実科教育課程の変遷からみると、第七次教育課程において実科教育課程の教科特性、すなわちその名称が示すように、実践的、体験的な活動を重視し、児童の実践的な経験と実生活上の有用性を重視する教科であることが確立したといえる。それは、哲学的基礎を労作教育に置いて手工活動を必須とし、活動の過程で創造的変容を大事にして進行するという性格を持つものであり、“実践的な生活能力をつける教科”、“創造的な労作教科”としての特性をもつ教科であるということである。

栄養教育に関する活動中心の学習戦略は、実科教育を

学習する児童の発達を踏まえて開発されたものである。すなわち、認知発達の面から活動的で好奇心が強く、また本質的に探究心が強いという特性を生かすとともに、児童の活動欲求と身体的な発達を考慮し、「遊び」、「ゲーム」、「童話作り」、「歌う」、「歌の歌詞作り」などの学習活動と、実際に調理を行うなどの体験活動中心の学習が提案されている。日本の家庭科においても大いに参考になるものであり、授業実践によって検証が求められるところである。

### 参考文献

- 1) 韓国教育部.『第七次教育課程「技術・家庭」解説書』1997.
- 2) 韓国教育部.『初等学校教育課程解説Ⅳ—数学、科学、実科—』1999.
- 3) 韓国教育部.『実科（技術・家庭）教育課程』1997.
- 4) 李慶愛.「活動主義に基づく初等学校活動中心栄養教育方案」、韓国栄養学会論集、第36巻第4号、2003.
- 5) 刈谷三郎、申範澈他著.『日韓教科教育入門』、日韓教科教育研究会、2007.
- 6) 4)と同じ
- 7) 厚生労働省.  
[www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/eiyousyokuji.html](http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/eiyousyokuji.html)